

1. 第12回定期審査終了

8月4日から5日の2日間にわたって、審査登録機関ASRでは2回目、旧審査登録機関JETでの認証取得以降では通算12回目の定期審査が実施され、事務所内各部署、第一工場、第二工場、阿久和工場の全社で受審しました。JETでは審査日程は1日でしたが、ASRは丁寧に活動内容をヒアリングし受審組織の効果的な活動に繋がる指摘をするために十分な審査日程を組んでいるとのことでした。神戸市から審査員1名が来社され、文書、記録の詳細なチェック、現場ヒアリング及び確認などにより環境マネジメントシステムが適用規格の要求事項に引き続き適合して実行されているかの確認を受けました。その結果、観察事項5件の指摘はありましたが不適合はなく、特に開発された製品には科学技術長官賞などを授与された優れた技術が盛り込まれ、現在も継続的改善を狙いとする計画的活動として、「省エネ製品又は環境関連製品の開発・製造」を目的目標に掲げて、全社員が一つの目標に推進していること、また内部監査は推奨事項19件（内良い点4件）など丁寧に監査が行われており、個々の指摘内容が細かく記述されていて、中でも取組みについての良い点を指摘することなど質が高く良い内部監査を行っていることが評価されました。また、今後、有機性塗料を水溶性の塗料への切り替えなどの検討する余地があるとのコメントもありました。事務所、現場で対応された方をはじめ、皆様、お疲れさまでした。お陰様で、無事に審査を終えることができました。審査へのご協力に感謝申し上げますとともに、今後も審査の結果を活かして環境マネジメントシステムの適切な維持管理に努めていきたいと思っておりますので、これからも継続して環境配慮の取組みにご協力いただけますよう、併せてお願いいたします。



2. 東日本大震災について（前号に続いて）

2011年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震により、大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらしました。また、それ以外にも地震の揺れや液状化現象、地盤沈下、ダムの決壊などによって、東北と関東の広大な範囲で被害が発生し、各種ライフラインも寸断されました。震災による死者・行方不明者は約2万人、建築物の全壊・半壊は27万戸以上、ピーク時の避難者は40万人以上に上りました。政府は震災による被害額を1兆8兆から2兆5兆円と試算しています。地震と津波による被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質の放出を伴う重大な原子力事故に発展しました。その他に火力発電所等でも損害が出たため、東北と関東は深刻な電力不足に陥り、その結果、計画停電、夏の電力使用制限、節電を行わざるを得ない状況となりました。

前号では「想定」自体がもともと不十分であった「想定外」もあれば、人間が「想定」することに限界がある、所謂、人智をこえた「想定外」があり前者は免罪符にならないという趣旨のことを述べました。震災以降、何故、このような事態に陥ったのかの経緯、事実が次第に明らかになってきています。これらを、検証してみると一時要因は、地震、津波による「天災」によると言えますが、ここまで被害が拡大したのは対策を怠った「人災」であると言わざるを得ません。



① 地震による受電鉄塔の倒壊で福島第1原発の外部電源が失われ、その結果、最終的に炉心溶融が引き起こされた

⇒ 電力会社の鉄塔が地震、地滑りなどの災害で被害をうける例は特に珍しくなく、数年に一度程度の頻度で起きている。原子力発電所関係に限定しても21世紀に入ってから複数回起きている事故である、対策として他送電ルートの多重化など十分に検討の余地があったのではないか。



② 原子力安全・保安院の話・「地震などで外部電源を喪失した場合、内部予備電源（非常用のディーゼル発電機）が稼働する。その際に格納容器を守るために実施するベント（排気）を行うためのマニュアルはあったが、今回の事故では津波により予備電源まで喪失しており、この状況に対応したマニュアルはなかった。即ち、ベントは電源があることを前提として、中央制御室で操作することになっており、まったく電源が入らない状況の想定をしていなかった。」



⇒ 予備電源まで失われる事態は予測していなかった。すべての電源を喪失した際、格納容器を守るために実施するベント（排気）のマニュアルがなかった。

③ 元原子力安全委員長の話・「何もかもがダメになる（全電源が失われる想定）といった状況は考えなくてもいいという暗黙の了解があった。隕石の直撃など、何でもかんでも対応できるかと言ったら、それは無理だ」

⇒ 隕石衝突クラス、確率も様々であるが、歴史年表のどこを見ても「隕石衝突」らしき災害は記されていないとされる。隕石の直撃を避ける方法も、映画の世界だけでなく検討されるべき課題では、無理だと片付けられるものではないのではないか。



- ④ 国の原子力安全委員会の作業部会「全交流電源喪失事象検討ワーキング・グループ」が1993年に全電源喪失対策を検討しながらも「重大な事態に至る可能性は低い」と結論づけていた。ただし明確な根拠は示されていないという。



専門家、政治家は何故、想定外として手を打たなかったのでしょうか。安全神話を過信していたのでしょうか。「重大な事態に至る可能性は低く」ても、至らないという保証は無かったのです。万一発生した場合の脅威を専門家であるが故に認識していたであろうに、何故対峙することを避けてきたのでしょうか。原子力神話に疑問を感じていたと今更、反省している専門家もいるなかで、国の原発推進政策に抗することもなく呑まれてしまい、重い腰を上げなかった理由は「確率」、即ち1000年に一度といわれる大震災で、自分の時代には起こらないと思っていたのでしょうか。ツケを後世に先送りするつもりだったのでしょうか。

過激な表現ですが、最悪の事態を想定した場合、放射能汚染で首都圏を含む東日本全体、いや、日本全体が汚染されて国家が消滅する事態になっていたかも知れません。

ただ難しさが待ち構えているのも事実です。対策、基準を厳格化すれば、原発の建設、運転コストが上がる可能性があり、これを発展途上国のほか先進国の一部も嫌っています。だが原発は事故が起これば、高い代償を伴います。目先のコストよりも安全こそが大切であることは今回の震災で肝に銘じたはずです。電力を供給し、地球温暖化を促進する二酸化炭素(CO₂)の排出を減らすには、原発は重要なエネルギー源であり続けるのでしょうか。この立場に立って対策、基準を強化すれば本当に安全になるのか。脱原発に進むべきではないか。



日本はどの道を選ぶか岐路に立ち、真剣に考えるときではないでしょうか。

3. 節電について

今夏、節電目標として前年対比15%削減を設定し、目標達成に向けて各部署ご協力の下に活動を推進しています。8月末時点で4月からの電力使用量累計は45,593kwで前年比20.6%の削減となっています。この使用量削減に伴い電気料金も前年より98,910円削減できています。削減できた金額の半額を、東日本大震災の被災者の方への義援金として送り、残りの半額を従業員へ還元する予定です。引き続き、節電にご協力下さい。

4. 余話

東日本大震災について草案を書いている時、昔、田舎のお寺で聞いた法話を思い出しました。

「ある男の人が旅をしていた。広い野原をとぼとぼ歩いていた。その時、突如として一頭の虎が現れた。旅人は驚いて立ちすくんだが、はっと気付いて走り出した。虎は、ランランと目を光らせながら、久しぶりに好餌を得んものと猛然と迫って来た。あわや、旅人は虎の牙にかからんとした時であった。目の前に古井戸があった。井戸の上をおおっていた木に藤づるがからんでおり、それが井戸の中にたれていた。旅人は助かったとばかりに、それに飛びついて、井戸の中に入らずと伝っていた。

虎は井戸の中までは来られなかった。旅人はほっと一息ついて、深井戸の底を見た。すると、そこには二匹の大蛇が真紅の火のような舌を出して、旅人の落ちて来るのを待ち構えていた。旅人は生きた心地がしなかった。旅人は上を見上げた。すると何ということだろうか、旅人の必死になってつかまっているその藤づるを、白と黒のねずみが、代わる代わるやって来ては、かじっているではないか。絶え間なくかじっている。旅人はもう駄目だと思った。

ところがその時、ふと目の前に、美味しそう野イチゴが実っているのに気が付いた。息を切らして一目散に逃げたため、喉が渇き、少し空腹を覚えたので、一つ口にした。すばらしい甘味である。ここにいれば、当面は食べるものには困らない。野イチゴの美味さに旅人は満足してしまっていて、虎や大蛇のいることも、又ねずみにかじられていることも、みんな忘れてしまった。

お釈迦様は、この旅人が迷える人間であり、人生の姿であると説かれた。古井戸は人生である。人間は一本の藤づる、一つの生命にかじりついている。その命のつるは、白と黒のねずみ、即ち昼と夜が代わる代わるやってきては、その命のつるが、絶え間なくかじられている。そしてそれが切れたら、苦しみの世界(大蛇の口)に沈まねばならぬのに、ただ朝夕、甘い野イチゴ(地位・名誉・財産など)に満足して、自分の危ない姿を忘れて生きているというのである。」

過去の悲惨な事態を教訓として、未来の事態に備えなければならない。過去、未来に目を塞ぎ、現状に甘んじて、無為に過ごしてはいけぬ。よくかみしめて心すべき。・・・というお話でした。

